

日本における「二地域居住」者の生活実践とアイデンティティ

——千葉県南房総地域に拠点をもつ人々を対象に——

鈴木 修斗*

1. はじめに
2. 二地域居住の開始経緯
3. 二地域居住者の生活実践
4. 二地域居住者としてのアイデンティティ
5. おわりに

1. はじめに

1-1 問題の所在

現在、日本の農村地域では、人口減少と地域経済の衰退が顕著にみられている。そのような問題を解決し、地域振興を図るための手段として、大都市圏から地方圏への人口流動を生み出すことが模索されている（首相官邸 2014; 国土交通省 2014）。その中で、都市住民が農村地域にも生活拠点をもち「二地域居住」の動きが注目されている。国土交通省（2018）によれば、二地域居住とは「都市部と地方部に2つの拠点をもち、定期的に地方部でのんびり過ごしたり、仕事をしたりする新しいライフスタイル」と定義される概念である。近年、二地域居住については体験記（馬場 2014）やメディアでの紹介によって、徐々にその概念が認知されるようになってきている。

しかし、日本国内で行われる二地域居住の実態について、学術的な研究は非常に少ない。とりわけ従来の研究は、実際の二地域居住者の姿や生活形態に関して、十分な理解をもたらすものではなかった（住吉 2021）。というのも、従来の研究では、政策手段としての二地域居住の実現に関心が向けられていたために、二地域居住者をとりまくハード面の整備（河内ほか 2017）や、法制度（日本不動産学会 2018）や公共サービス負担（難波 2016）といったソフト面の整備に研究の主眼がおかれていたからである。二地域居住それ自体に対する理解を深めるためには、二地域居住の政策的な実現可能性を分析するという姿勢だけでは不十分である。筆者は、二地域居住を実践し、そうしたライフスタイルをもつことが、実践者本人にとっていかなる意味をもつのかを検討することが重要だと考える。そのためには、実践者本人の生活実態の中に二地域居住の実践を位置づけた分析が必要となる。

従来の日本での二地域居住に関する研究が抱えていた問題点として、理論的な位置づけが不明瞭であったことが挙げられよう。従来の研究では、二地域居住という概念の定義が時代によって大きく変化している状況を反映して、まずはその実態を丁寧に分析することに関心が向けられていた（住吉 2021）。しかし、二地域居住とよばれるライフスタイルが広がりを見せている現在において、学術的な議論を発展させていくためには、理論的研究の成果を実証研究として昇華させる作業も必要となろう。特に近年、欧米圏の人文社会科学においては「移動」に焦点を当てたモビリティ研究（Urry 2007; Sheller and Urry 2006）とよばれる学際的領域の発展がみられており、その理論構築にあたって、移動する人々がもつ生活実践とその意味の把握が重要な作業の一つとなりつつある（Elliot and Urry 2010）。そのため、二地域居住を実践する人々を研究対象とする場合も、実践者にとって

二地域居住というライフスタイルがもつ意味を、彼ら彼女らの生活に即して分析する意義が高まる。こうした研究は、人々の移動に対する定住主義 *sedentarism* 的な理解への反省から、「定住」と「移動」の境界を曖昧で複雑で重層的にするというモビリティ研究の潮流を地理学に導入していく上でも、有効な視座を提供するだろう。

本稿は、日本での二地域居住に関する研究の系譜を継承しつつ、モビリティ研究の視点を導入することによって、従来の研究の問題点を多少なりとも乗り越えて、近年活発化しつつある二地域居住に関する研究の進展に寄与することを目的としている。以下では実証研究に先立ち、二地域居住者の実践とその意味に関連する研究の動向を概観することによって、検討すべき課題を精査したい。それを踏まえて、本稿独自の意義を提示する。

1-2 既存研究

二地域居住者の実践とその意味に関連する研究は、日本よりも欧米圏において先駆的に進められてきた。特に欧米圏の農村研究では、セカンドホーム *Second home* 研究とよばれる領域において、セカンドホーム（主として別荘）の消費実践とその意味に関する検討が進められてきた。別荘利用は二地域居住と類似する現象であり、本稿の検討においても有益な視座を提供すると考えられることから、以下ではそれらの研究群の検討を行う。

セカンドホーム研究では、従来、人々のセカンドホームの消費の実践を、都市での日常生活からの「逃避」の表現として捉えてきた（Kaltenborn 1998 など）。しかし近年の研究では、日常生活からの「逃避」の表現というよりも、日常生活のルーティン化とそれによって引き起こされる実存的問題に対する「否定」の表現としてセカンドホーム消費を捉える見方が強まっている（Quinn 2004; Garvey 2008）。すなわち、セカンドホーム消費とは「日常生活の中では成し遂げられないものを味わう」実践であり（Garvey 2008: 218）、日常生活のルーティンを断ち切ることで得られる感覚こそが重視される。またそれは、「つながりの感覚を生み出す経験、時間、場所を再発見する試み」（Quinn 2004: 118）でもある。これらの議論からは、セカンドホーム消費を単なる「逃避」の実践として捉えるのではなく、個人の日常生活の延長線上に位置づけて考えることの重要性が示されている。

しかし、セカンドホーム消費の実践は「モビリティの時代」（Sheller and Urry 2006; Urry 2007）の到来によって、さらに複雑化している。永住、一時的居住、レジャー、日常生活の区別が崩れてきている現代社会（Hannam 2008）において、仕事、家、遊びは時間と場所において分離され、人々がもつ意味とアイデンティティは、一つの場所ではなく複数の場所を中心に構成されるようになる（McIntyre et al. 2006）。こうした中で、Halfacree（2012）はモビリティの時代におけるセカンドホーム消費の実存的意义を考察する上で「動的ヘテロローカリズム」の考え方を導入した。ヘテロローカリズムとは近年のアメリカにおける移民の社会空間的な存在形態に関するモデルである。その特徴は(1)居住の空間的分散、(2)新しい通信手段や移動手段によるエスニック・コミュニティとしての結合の維持、の2点に集約される（Zelinsky and Lee 1998）。このモデルを拡張させた動的ヘテロローカリズムの考え方は、人々のセカンドホーム消費を、複数の場所を通じてアイデンティティとライフスタイルを形成するための方法として捉える。以上の研究を踏まえれば、モビリティの時代における人々のセカンドホーム消費は、(1)個人の日常生活の延長線上にあり、(2)複数の場所との関わりを通じて自身のアイデンティティとライフスタイルを形成するための方法、として理解できる。特に後者の動的ヘテロローカリズムの視点については未だ理論的検討の域をすぎておらず、実証研究への応用が期待される。

本稿では、日本国内において二地域居住を実践する人々を対象に、彼ら彼女らがなぜ二地域居住を開始したのか、都市と農村という二つの場所の間でどのように生活を編成してきた（している）のか、また二地域居住というライフスタイルをどのように意味づけているのか、どのような将来展望を描いているのかなどについて考察する。こうした試みは Halfacree（2012）が仮説的に提示した動的ヘテロローカリズムの考え方を実証的に明らかにしようとするものである。とりわけ本稿を特徴づける分析視点は、「都市的なもの」と「農村的なもの」との関係において二地域居住者の実践を理解することにある。ここでの「都市的なもの」「農村的なもの」とは、都市や農村の文化的・社会的価値観や規範意識、ライフスタイルなど、都市的・農村的と形容されて語られ、個人のアイデンティティを構成すると考えられる事象を包括的に指す概念として定義したい。本稿の対象者は、自らの意思で二地域居住を実践している人々である。しかし彼ら彼女らは、「都市」のライフスタイルや価値観を捨てて「農村」社会に同化しようとしているわけではない。このように、彼ら彼女らが意識的、あるいは無意識的にとって

いる「都市的なもの」「農村的なもの」に対する立ち位置を明らかにすることによって、二地域居住者としてのアイデンティティの形成過程を分析・考察することが、本稿の独自の意義である。こうした分析は日本における二地域居住に関する新たな研究の論点を導出することにもつながるだろう。

1-3 研究対象と調査の概要

本稿では、日本国内における二地域居住の実践者に焦点を当てる。国土交通省国土計画局広域地方整備政策課（2010）のアンケート結果によると、二地域居住を実践する人々（ $n=1499$ ）の居住地は東京圏（東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県）が 32.8%と最も多い。また、東京圏に居住する人々の二地域居住の滞在先（ $n=400$ ）としては、甲信越地方（山梨県、長野県、新潟県）が 37.5%と最多である。しかし、山梨県や長野県は別荘地域として知られており（例えば佐藤・澁谷 2015）、別荘利用者と二地域居住者との区別がつきにくいと考えられる。そこで、甲信越地方に次いで滞在先としての割合が高い東京圏（17.5%）内での二地域居住が注目される。

東京圏の中でも千葉県南房総地域¹⁾は、東京圏の中でも農村環境に恵まれた地域であり、二地域居住の先進地域として紹介されることが多い（馬場 2014; 河内ほか 2017; 住吉 2021）。そのため、東京圏内の都市的地域との間で二地域居住を実践する人々が一定数存在することが想定される。千葉県南房総地域において二地域居住が進展する背景には、第 1 に交通の利便性が挙げられる。南房総地域は房総半島南端に位置しており、周囲を東京湾と太平洋に囲まれた隔絶性の高い地域でありながらも、沿岸部には JR 内房線ならびに JR 外房線が通り、東京湾に面した内房地域には、東京湾アクアラインや京葉道路に接続する富津館山道路（自動車専用道路）が通るなど、交通の利便性が高い（図 1）。第 2 に豊富な観光資源の存在が挙げられる。南房総地域は戦前より海水浴観光が発展しており、第 2 次世界大戦後には、夏の海水浴観光地域として一層の発展をみた。また、1990 年代頃からはグリーンツーリズムやエコツーリズムの進展がみられており（山村 2009）、二地域居住者の需要を満たしていると考えられる。以上のような背景から、本稿の目的を達成するためには、東京圏内の都市的地域と千葉県南房総地域との間で二地域居住を実践する人々に着目することが有効であると考えられる。

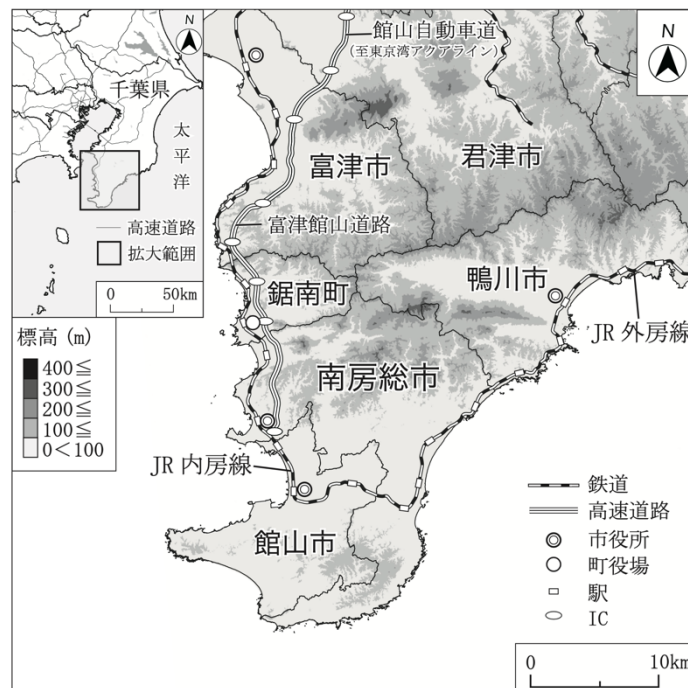


図 1 千葉県南房総地域の概要
IC はインターチェンジの略。
（国土数値情報および基盤地図情報により作成）

筆者は、2018 年 4 月から 7 月にかけて、東京圏内の都市的地域と千葉県南房総地域との間で二地域居住を実践する人々に対して、東京都内ないし南房総地域の拠点において 1～2 時間程度の半構造化インタビューを実施した。また、東京都内で開催される二地域居住の希望者が集まるイベントに参加し、情報収集を行った。調査対象者の選定は次のような形で行われた。まず、自身の二地域居住の経験について情報発信を行う人物に連絡を取り、インタビューを行った。そしてインタビュー終了後に、他の二地域居住者の紹介を紹介してもらいスノーボール・サンプリングの形をとった。したがって本稿の調査対象者は、統計的な手続きに基づいて選定されたものではない。こうした手法の問題点として、対象者の属性に偏りが生じる点が挙げられる。しかし、統計的な把握が難しい二地域居住者の捕捉においては非常に有効な手法となるため、採用することにした。

調査全体では 10 人の二地域居住者にインタビューを実施した。そのうち本稿では、生活実践に関する詳細な記録を参照することができる 7 人の対象者を主な分析対象とする。対象者の基本属性については表 1 に示した。以下、本稿では次の手順で研究を進める。Ⅱでは対象者の二地域居住の開始経緯を明らかにする。Ⅲでは対象者の二地域居住に関わる生活実践の諸相を明らかにする。以上を踏まえてⅣでは二地域居住者の「都市的なもの」「農村的なもの」に対する立ち位置に焦点を当てて、彼ら彼女らのアイデンティティの形成過程を考察する。そしてⅤでは、本稿の知見をまとめて結論を述べる。

表 1 インタビュー対象者の基本属性 (2018 年)

ID	年齢	性別	出身地	家族	職業	従業地	開始時期	拠点
1	40 代	女性	東京都	夫・子	自営業	主に東京都	2007	東京都目黒区・千葉県南房総市
2	40 代	男性	東京都	独身	自営業	主に東京都	2007	千葉県南房総市
3	40 代	男性	埼玉県	妻・子	自営業	主に東京都	2008	千葉県館山市・東京都江東区
4	60 代	男性	東京都	妻	会社員	千葉県成田市	2011	東京都葛飾区・千葉県富津市
5	50 代	男性	千葉県	妻・子(独立)	会社員	東京都千代田区	2011	千葉県流山市・千葉県南房総市
6	50 代	男性	北海道	妻・子(独立)	会社員	東京都千代田区	2014 頃	神奈川県横浜市・千葉県館山市
7	30 代	男性	東京都	妻・子	会社員	東京都品川区	2017	神奈川県横浜市・千葉県南房総市

「拠点」の下線部は 2018 年現在での主たる居住地。

(インタビュー調査により作成)

2. 二地域居住の開始経緯

本章ではまず、対象者が二地域居住を開始した経緯を明らかにする。二地域居住は観光と移住の中間的な性格をもつことから、対象者にとっての二地域居住の実践の意味をより深く理解する際には、観光実践との関わりにおいてその開始経緯を検討することが有効であろう。そこで本章では、二地域居住の開始経緯について直接的なデータが得られた ID2～ID7 の事例をもとに、特に観光実践との関わりに注目しながら検討を行う。

まず、観光実践への意欲から二地域居住を開始した事例を紹介する (ID3、ID5、ID6、ID7)。ID3 は、2008 年頃より東京都江東区の拠点と千葉県館山市の住宅との間で二地域居住を行っている。ID3 が二地域居住を開始したきっかけは、義理の父が体調を崩したことである。もともと義理の両親は定年退職後に旅行を考えていたが、義理の父の介護の問題もあり困難となったため、代わりに義理の母が週末に行けるような「別荘」のような古民家を探していた。東京都心から 100km 圏内で交通の便の良い場所、という条件で物件を探し始め、館山を訪れた際に「ハワイに見えた」という館山の景観に惹かれ、館山市内で物件を取得した。ID5 はもともとアウトドア好きで、かつてはワンボックスカーを改造したキャンピングカーで日本中を回っていたこともあったという。次第にドッグランや露天風呂を作って遊びたいという思いが強まり、長野県、那須、伊豆、房総などの土地と物件を探す日々を 5～6 年続けた。冬でも暖かく、海から一定の距離がある場所という条件で探したところ、不動産屋から南房総市の旧三芳村の物件を紹介された。ID6 は、北海道の「田舎」の出身であったこともあり、将来的には「自分の落ち着ける場所がほしい」と思っていた。ロンドンを訪問した際に、郊外に家を持っている人が多いことに気づき、自分もそうしたライフスタイルを送りたいと考えるようになった。最初は自宅から近い三浦半

島で物件を探したが、沿線の開発が進んでおり「気分転換にはならない」と考えた。ある時、趣味のサイクリングで南房総地域を訪れた際に「田舎」の要素が残っていると思ったことが契機となり、富津市や館山市などで住宅を探すようになった。古民家はメンテナンスが大変なので、普通の戸建住宅を中心に物件を探した。また、集落に住むことによって「(周りの人に) いろいろ教えてもらえるといいと思っていた」という。結果的に館山市内で物件を購入し、二地域居住を開始した。ID7は普段は東京都品川区でシステム系の営業職として働いている。両親とも東京都出身であったことから、小学生時代には友達が「田舎に帰る」ことを羨ましいと思っていたという。元々キャンプ好きなこともあり、暇な時にインターネットで土地や物件の価格を検索していた。横浜市の自宅は2013年頃に購入したが、住宅価格があまりにも高かったことから、半ば現実逃避的に千葉県内の物件をインターネットで検索して見ていたところ、千葉県内の土地物件価格が非常に安いことに気づいた。子どもたちも「田舎がいい」と言っており、移住も視野に入れて考えたが、経済的にも仕事的にも移住は難しいと考えていた。その頃、たまたま「二地域居住」に関する本を読んだことがきっかけで、二地域居住の可能性が浮上してきた。しかし、南房総地域での拠点となる物件を購入する余裕もなかったため、物件をシェアできないかと考え始めた。ちょうどその頃、ID2がインターネット上で発信していた古民家改修の情報を見つけて問い合わせをして、月1〜2回のペースで南房総地域に通うことになった。ID2とつながりができたことで、南房総地域で賃貸物件を紹介してもらえるようになり、2018年に物件を契約して二地域居住を開始した。

他方で、観光実践の延長線上で二地域居住を開始した事例もある(ID2、ID4)。ID2は東京都武蔵野市で生まれ育ち、東京都港区に居住した後、千葉県南房総地域で二地域居住を開始した。2007年に、両親と姉が房総半島中部に位置する木更津市に移住したことを契機に、南房総地域を訪れるようになった。当初は週末の土日に月2回ほど訪れる程度であったが、「息抜き代わり」に訪問を重ねるうちに、次第に南房総地域に惹かれるようになり、館山市にワンルームを借りて二地域居住を開始するようになった。その後、南房総市内において複数人で物件を共用して二地域居住を継続していたが、南房総市を訪問する頻度が増えたことや、東京で仕事をする必要がなくなったことなどを契機として、移住を決断した。2015年頃からは南房総市内に住宅と活動拠点を取得し、地域内外の参加者が交流するイベントや企画の場としている。ID4は生まれも育ちも東京都荒川区で、親や配偶者も東京都内の出身のため「帰省」の経験がなく、(子どもの頃から)「帰省」がうらやましかったという。ID4は高校卒業後に就職し、銀行関係の子会社に勤めた後、国際航空関係の仕事を行っていた。もともと釣りが好きで週末は南房総によく遊びに来ていたが、釣りをする時は朝が早く、金曜に仕事が終わってから朝3時に東京の家を出るような生活をしていたため、次第に釣りの休憩場所がほしいと考えるようになった。経済的な問題から難しいとは考えていたが、定期的に不動産屋に顔を出して物件を探していた。毎週南房総に行くとなった場合の距離・時間・交通費を考えると、館山市は遠すぎるので、南房総市や富津市の付近で住宅を探していた。そうした中で、富津市内の集落に立地する、母家と別宅がセットになった物件を紹介された。この物件は家主が介護施設に入ったため空き家になっており、別宅に住んでいた家主の息子も仕事の関係で引っ越したことから別宅も空き家になっていた。母家はボロボロで外壁が落ち、床も傾いていたことから、非常に安い価格で入手できたという。

以上、対象者の二地域居住の開始経緯について述べた。その背景を深く探っていくと、対象者の多くは観光実践の延長線上に二地域居住の実践を位置づけていたことが指摘できる。また、これらの観光実践の原動力となっているのは「農村的なもの」への憧れであった。その一方で、対象者のインタビューからは、都市での日常生活を「否定」はしつつも、都市から「逃避」したいといったような語りはほとんど見受けられなかった。このことは、本稿の対象者たちが、必ずしも「都市的なもの」を忌避しているわけではなく、むしろ「都市的なもの」の延長線上に二地域居住を位置づけている可能性が示唆される。そこで次章では、二地域居住者の実際の生活実践に焦点を当てて、彼ら彼女らの「都市的なもの」「農村的なもの」に対する立ち位置を読み解いていく。

3. 二地域居住者の生活実践

前章の分析では、対象者たちが「都市的なもの」の延長線上に二地域居住の実践を位置づけている可能性を指摘した。そこで本節では、二地域居住者が実際の生活実践の中で意識的・無意識的にとる「都市的なもの」「農村

的なもの」に対する立ち位置をより深く分析する。本節では、二地域居住者の日常生活の実践にとって重要な二つの要素、すなわち仕事と社会関係の各要素に注目して、それらの要素が対象者自身のライフスタイルやアイデンティティとどのような関係にあるのかを検討する。

3-1 仕事

まずは対象者の仕事の側面を検討する。はじめに検討するのは「都市」での「仕事」に比重を置きながら二地域居住を継続している事例である（ID3）。ID3は、2008～2012年頃までは、1週間のうち東京都内に滞在するのは5日、館山市に滞在するのは2日程度であった。2018年現在、1週間のうち東京都内に滞在するのは2日、館山市に滞在するのは5日程度である。主に仕事がある時に東京都内に出ているが、仕事の忙しさ次第で1週間の滞在時間の配分が変化するという。東京都内に拠点を有する理由は、仕事以外のローカルなつながりの存在もその要因となっている。特に仕事の拠点がある江東区では、地元の町会の理事を務めた経験があり、お神輿の運営にも携わっていたことから「繋がり」を残している。設計士であるID3は「(自分の)仕事は都市の仕事」と語る。ID3いわく「建築の世界で、田舎にいくというのは下野」であるが、「田舎でも(自分の仕事を)やれるという自身があった」という。一方で、「田舎者になりたいか、ということそうではない」「(二地域居住の)基礎になっているのは都市的な考え方」といった考えも有している。ID3の語りからは、自身の仕事に対する「都市的なもの」と「農村的なもの」のゆらぎを感じ取ることができる。

次に「都市」での「仕事」に比重を置きつつも、「農村」での「仕事」を模索している事例を紹介する（ID7）。ID7は、2018年現在、将来的に南房総地域に移住する案はもっていないという。あくまで二地域居住を続けたいというスタンスのため、賃貸物件を契約しているという。しかし、仕事もオンライン化が進んでいることから、場所を選ばないことが多く、どこに行っても仕事ができる地盤は作っているという。その背景には「都心はコストが高い」という考えがある。「都心(の会社)で雇用、仕事は別(の場所でやりたい)」と話している。テレワークや副業も認められているが、移住は「そっち(南房総地域)で仕事を見つけた時」であり、「今はもう少しスライドしていくのも可能なので、その方策を模索したい」と話している。南房総地域での仕事の一環としてID7が模索しているのは、ホームパーティーイベントの開催である。彼は学生時代にショットバーでアルバイトをした経験があり、「千葉(南房総)で(バーを)やったら面白い」と考えていることから、2018年現在はID2らとともに南房総地域の拠点で「週末里山バー」「週末焚き火バー」などのイベントを開催している。ここで稼いだお金の一部は古民家の修繕費等に充てている。このイベントはホームパーティーの延長線上の性格を有しており、市役所職員や近所の集落の住民が参加し、二地域居住者、移住者、地元住民らが交流する場となっている。ここで注意したいのは、ID7が構想する「農村」での「仕事」とは、農業を基盤としたいいわゆる「農村的な仕事」ではなく、対個人サービスの提供を中心とした「都市的な仕事」として位置づけられることである。後述のように、「都市的な仕事」を「農村」で実現しようとする対象者は他にも見受けられた。

最後に「都市」での「仕事」から徐々に「農村」での「仕事」への比重を高めている事例を紹介する（ID4、5、6）。ここでは特に注目すべき対象者として、ID4の事例を詳しく紹介する。ID4は、定年まで務めた会社を退職後、現在は千葉県成田市の会社に勤務している。二地域居住を想定していたため、2018年現在は週3日のみ出勤を行っている。定年退職後もサラリーマン生活を続ける理由に「会社とつながっていた方が、社会保障や給料の面で(条件がいい)」ことを挙げている。ID4は、毎週木曜日の夜に職場を出発して、金曜日から日曜日の午前中までは富津市の住宅に滞在し、日曜日の午後には東京都内の自宅に帰る生活を送っている。しかし、筆者がインタビューを行った際には、毎週土曜日から火曜日に富津市の住宅に滞在し、水曜日から金曜日までは東京都内の自宅に滞在する生活に切り替えつつあると話しており、徐々に富津市の住宅への滞在時間が長くなっている。彼がこうしたライフスタイルの変容を実践する理由には、「金よりも(南房総地域で活動するための)時間がほしかった」ことを挙げた。ID4は「仕事をやめたら(富津に)移住」したいと考えている。しかし何も収入がないのは大変なので、現在ボランティアでやっている家の修繕の仕事を通して今のうちに「名前を売っておこう」と考えている。将来的には家の修繕で稼ぎを得ようと考えており、最近では「だんだん声はかかるようになった」という。こうした将来展望をもつようになった背景には、南房総地域に移住した人々が見せる暮らしぶりがある

と話す。その中には「定職をもたない人」「出張料理人」「飲み会の場所だけを提供する人」がおり、「それだけでやりくりができる」という。この語りからは、「都市」での「仕事」を引退した後は「農村」での「仕事」に取組みたいという思いが読み取れる。しかしここで ID4 がいう「農村」での仕事とは、DIY、副業、お裾分けなどを組み合わせたフットルースな仕事の組み合わせであり、近年では「ナリワイ」と呼ばれて注目されている仕事のあり方（伊藤 2012）に類似する。ここでの「仕事」とは、ID7 の事例でも紹介したように、いわゆる「農村的な仕事」だけでなく、むしろ「都市的な仕事」にも近い性格を有する点には留意する必要がある。すなわち、ID4 や ID7 が「農村」で実現したいのは、いわゆる「農村的な仕事」とも異なるが、完全に「都市的な仕事」ともいえないハイブリッドな仕事のスタイルなのである。

3-2 社会関係

次に社会関係の側面について検討していく。南房総地域においては、先駆的なリーダーの存在によってフォロワーである二地域居住者同士の社会関係が構築されていることが指摘されている（住吉 2021）。本稿のインタビュー調査においても、こうした社会関係の仕掛け人である ID1 と ID2 の存在によって、多様な社会関係が構築されていることが明らかとなった。しかし本稿では、既存研究が焦点を当ててきたリーダーによる社会関係構築の取り組みではなく、リーダーの活動に影響を受けたフォロワー（ID4、ID5、ID6、ID7）がどのような社会関係を構築しているのかについて詳しく分析することで、既存の議論をさらに発展させることを目指したい。

ID4 は、成田市の職場から富津市への移動中に、たまたま ID1 が出演していたラジオ番組を聞いたことで「二地域居住」という概念を知り、自分と同じような生活を送っている人が他にもいたことを知った。彼はこうしたライフスタイルを「別荘」として考えていたわけではなかったのも、「二地域居住」の概念が「しっくりくる」と感じた。それと同時に、「こういう（ライフスタイルをもつ）人が他にもいたんだ」ということを知った。その後、SNS 上で告知されていた ID1 主催のイベントに出席したことを契機に、同様のライフスタイルをもつ知り合いができたことから、南房総地域で活動する際にはお互いの作業を手伝うようになった。こうした状況を ID4 は「南房総ではいろんな人とネットワークができてくる。みんなこっちに来てから知り合った。作業している時しか知らない。それぞれの人の事情を知らない。会社とかも知らない。でもこれが面白い。作業が終わってから聞いてみると、IT 関係とかいろいろ出てくる」と話している。ID5 は、二地域居住を開始した最初の 2 年はほとんど知り合いがおらず、友人を連れてきて拠点の敷地内で遊ぶ程度であった。拠点の敷地は、自身でパワーショベルやチェーンソーを買ってきて整備した。二地域居住を開始してから 3 年後くらいからは、ID1 が企画するイベントに参加するようになった。参加のきっかけは SNS であった。SNS でつながった地元の農家や U ターン者とも知り合うようになり、交友関係を拡大している。ID6 はもっぱら「会社の同僚」や「趣味の自転車仲間」を南房総地域の拠点に招待している。それ以外にも、集落以外の南房総地域の人々とのつながりを持っており、「生活者仲間といった感じ」の関係を保っている。特に二地域居住者同士は SNS でつながっていることが多く、ID1 が主催するイベントで関係を構築することが多いという。ID7 は、前述のように ID2 の影響で二地域居住を開始した。2018 年現在では「二地域居住は僕が勝手にやりたくてやってる感じ」と話しており、配偶者や子どもはたまに同行する程度であるという。特に冬場は 1 人で来ており、毎週金曜日から日曜日の午前まで南房総地域に滞在する。配偶者や子どもが同行するかどうかは「妻の予定や子どもの習い事次第」である。南房総地域に同行するのは、むしろ「地元の友達」「会社の後輩」「飲み屋で会う友達」「家族ぐるみで付き合いしている人」が多い。ID7 はそうした人々とともに、草刈り、山の木の伐採、竹藪の開拓などの作業を行っているという。ID4～ID6 の語りからは、いずれも匿名的で流動的な「都市的な社会関係」を「農村」という場で実現されることに意義を見出していることが読み取れる。また、ID6 と ID7 の語りからは、「都市」での「社会関係」を「農村」で発展させることを目指していることも読み取れる。

一方で対象者たちは「農村的な社会関係」を重視していないわけではない。例えば ID3 は「地元の人に挨拶したら、区長さんに『よく来てくれた』『町会に入ってくれ』と言われた」ことが契機となり、「農村的な社会関係」が構築された。ID4 は、隣家の家主と顔見知りになり、自治会のことを教えてもらったことをきっかけに、年次総会にも参加し、自治会の年会費も払っている。草刈り等の共同作業は「無理してやらなくていいよ」と言われ

ているが、富津市の住宅に滞在する時には参加するようにしている。草刈りをやっておかないと、獣害などで周りに迷惑をかけてしまうため、最低限自身の住宅の敷地は綺麗にしている。ID5は集落の区会の準会員となっており、毎年の区費を払っている。準会員は草刈りの活動などには参加する必要がある。区の住民とは「仲が悪いでも良いでもない」関係を築いているという。ID6は、集落での活動については「大目に見てもらっている」と話す。活動としては貯水池の草刈り、お不動様とお墓の清掃などがある。毎年7月の初旬に2回ほど顔を出すようにしており、特に大きな家の前の草刈りが大変なので参加するようにしているという。また、それ以外の時でもタイミングが合えば参加するようにしている。集落の活動に参加する動機としてID6は「お話ができればいろんな情報を得られる」ことを挙げている。このように、対象者たちは「都市的な社会関係」に加えて「農村的な社会関係」とも適度な距離を保つことによって、南房総地域での生活実践をより充実させたものになっている。

4. 二地域居住者としてのアイデンティティ

以上を踏まえて、本章では東京圏と千葉県南房総地域との間で二地域居住を実践する人々が、「都市的なもの」「農村的なもの」をどのように評価し、どの程度の距離を保っているのか、その立ち位置に焦点を当てつつ、彼女らの二地域居住者としてのアイデンティティの形成過程について若干の考察を行う。

既存研究では二地域居住が移住の次善策としての役割をもつ（住吉 2021）ことが明らかにされた。本稿ではそのことに加えて、観光実践の延長線上にあることを明らかにした。さらにそうした観光実践が「都市的なもの」から逃れるために行われるものではなく、むしろ「都市的なもの」の延長線上に位置づけられる可能性が示唆された。そこで対象者の生活実践を検討すると、仕事の側面では「都市」での「仕事」が二地域居住を継続させる原動力の一つになっていること、「都市的な仕事」の「農村」での実現が目指されていること、「都市的な仕事」と「農村的な仕事」を組み合わせたハイブリッドな仕事のスタイルが模索されていることなどが明らかとなった。そして社会関係の側面では、匿名的で流動的な「都市的な社会関係」の「農村」での実現や、「都市」での「社会関係」を「農村」に持ち込むことが目指されていた。一方で「農村的な社会関係」を必ずしも重視していないわけではなく、適度な距離を保つことによって生活実践をより充実させたものにしようとする意欲がみてとれた。

本稿では、都市や農村の文化的・社会的価値観や規範意識、ライフスタイルなど、都市的・農村的と形容されて語られ、個人のアイデンティティを構成すると考えられる事象を「都市的なもの」「農村的なもの」と呼んだ。ここで、「都市」での日常生活は「否定」の対象になるものであった。一方で「都市的な仕事」や「都市的な社会関係」は「否定」すべきものとされず、むしろ「農村」での生活実践においてもその発展・活用が模索されていた。疑問として残るのは、なぜ彼ら彼女らは「都市」での日常生活を「否定」しつつも、「都市的なもの」を「農村」で発展・活用させようとしていたのかである。先に分析したように、本稿の対象者たちは、「都市」での「社会関係」が皆無というわけではない。また必ずしも「都市的な仕事」から逃避したいと考えているわけでもない。つまり、これらの「都市的なもの」は、「都市」における日常生活のルーティンの中では必要不可欠であるが、その発展・活用が難しいものであると考えられる。だからこそ、それらのルーティンを断ち切るための手段として「農村」という場への移動の選択や、「農村的なもの」との関わりが重視されるのであるであろう。さらにいえば、本稿ではデータが不足しており十分な議論ができないが、対象者たちは「農村」における生活実践を「都市」での日常生活にフィードバックすることに意義を見出しているのではなかろうか。だからこそ、二地域居住というライフスタイルが「都市」での日常生活の延長線上にあるものとして受け入れられるのである。

こうした考察を踏まえると、確かに二地域居住は、複数の場所と関わり合うことで自身のライフスタイルとアイデンティティを形成するための方法（Halfacree 2012）として理解できる。しかし、対象者自身にとって、二地域居住とはあくまでも「都市的なもの」を発展させるための手段であり、「農村的なもの」にどっぷりと浸かるライフスタイルとはいえないのではないかと。すなわち、二地域居住は「都市」の日常生活の延長線上に存在するものであり、「都市」という場では実現できない「都市的なもの」を「農村」で発展・活用させるためのライフスタイルであると考えられる。このように、二地域居住者が、農村においても都市での日常生活の延長線上に自身のライフスタイルやアイデンティティを位置づけているとするならば、その経験は別荘利用や避暑といった他の

居住形態と共通する部分も出てくると考えられる。二地域居住という生活実践の内実を明らかにするためには、「都市的なもの」「農村的なもの」に対する立ち位置をさらに詳細に調査し、他の居住形態といかなる点で共通しており、いかなる点が異なるのかを議論していくことが必要となるだろう。

5. おわりに

本稿では、東京圏と千葉県南房総地域との間で二地域居住を実践する人々に着目して、彼ら彼女らの「都市的なもの」「農村的なもの」に対する立ち位置に焦点を当て、二地域居住の開始経緯と生活実践を分析してきた。COVID-19 のパンデミックを経て、二地域居住の実践はより社会的な注目を集めるようになってきている。しかし、その生活実践やアイデンティティの実態は十分に明らかにされていない。本稿はそのような限界を乗り越えるため、欧米圏のモビリティ研究の理論を取り入れつつ、日本における二地域居住者の実態を明らかにしてきた。とりわけ本稿で注目した動的ヘテロローカリズムの考え方 (Halfacree 2012) は、二地域居住者のみならず、他の移動生活者の生活実践とアイデンティティを明らかにする上でも、有効な視座を提供すると考えられる。今後は欧米圏の理論も踏まえつつ、さまざまな移動生活者の特性をより詳細に明らかにしていく必要がある。

本稿の課題としては、第 1 に、本稿は 7 人という非常に限られた対象者から得られたデータを分析したにすぎず、一般性を有する結論が得られていないことが挙げられる。今後は対象者の数を拡大して、より一般性のある結果を求めていく必要がある。第 2 に、本稿で紹介したのは南房総地域という一地域の事例であり、日本の全体的な二地域居住の動向を把握できなかったことである。今後はこれらの課題を解決して、日本における二地域居住の全体像をより詳細に探っていく必要がある。

謝辞

インタビュー調査に際しては、東京圏と千葉県南房総地域との間で二地域居住を実践する皆様に多大なご協力とご配慮をいただきました。末筆ながら感謝申し上げます。本稿は、筆者が筑波大学大学院在学中に修士論文の予備調査の一環として実施した調査の成果である。本稿はなかなか発表の機会に恵まれず、刊行が大幅に遅れてしまった。インタビュー調査にご協力いただいた方をはじめ、関係者の皆様にはお詫び申し上げる次第である。

注

1) 本稿では、千葉県南房総地域を「富津市、鴨川市、鋸南町、南房総市、館山市」の 4 市 1 町として定義する。

引用文献

- 伊藤洋志 2012. 『ナリワイをつくる——人生を盗まれない働き方』東京書籍.
- 河内 健・森永良丙・中嶋美一 2017. 南房総地域における二地域居住を促す滞在拠点に関する研究. 日本建築学会技術報告集 23: 235-240.
- 国土交通省 2014. 『国土のグランドデザイン 2050』
- 国土交通省 2018. 『二地域居住推進の取組事例集』
- 国土交通省国土計画局広域地方整備政策課 2010. 『平成 21 年度「二地域居住推進施策のための基礎的調査」——都市と地域の交流・参加のための政策的方向性』
- 佐藤大祐・澁谷和樹 2015. 富士山麓における別荘地の開発と利用形態. 地学雑誌 124: 965-977.
- 首相官邸 2014. 『まち・ひと・しごと創生総合戦略』
- 住吉康大 2021. 日本における「二地域居住」の実態と地域振興との関係性——千葉県南房総市および周辺地域を事例に. 地理学評論 94A: 348-363.
- 難波 悠 2016. 二地域居住における公共サービス負担に関する一考察. 東洋大学 PPP 研究センター紀要 6: 1-14.
- 日本不動産学会 2018. 特集「二地域居住とそれを支える不動産法制度」. 日本不動産学会誌 32(2): 37-107.
- 馬場美織 2014. 『週末は田舎暮らし——ゼロから始めた「二地域居住」奮闘記』ダイヤモンド社.
- 山村順次 2009. 南房総地域. 菅野峰明・佐野充・谷内達編『日本の地誌 5 首都圏 I——東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県』552-567. 朝倉書店.
- Elliot, A., and Urry, J. 2010. *Mobile lives*. London: Routledge. エリオット, A.・アーリ, J. 著, 遠藤英樹監訳 2016. 『モバイル・ライヴズ——「移動」が社会を変える』ミネルヴァ書房.
- Garvey P. 2008. The Norwegian country cabin and functionalism: a tale of two modernities. *Social*

- Anthropology/Anthropologie Sociale* 16: 203–20.
- Halfacree, K. 2012. Heterolocal identities? Counter-urbanization, second homes, and rural consumption in era of mobilities. *Population, Space and Place* 18: 209–224.
- Hannam K. 2008. Tourism geographies, tourist studies and the turn towards mobilities. *Geography Compass* 2: 127–139.
- Kaltenborn B. 1998. The alternative home: motives of recreation home use. *Norsk Geografisk Tidsskrift* 52: 121–34.
- McIntyre N, Williams D, McHugh K. 2006b. Multiple dwelling: prospect and retrospect. In *Multiple Dwelling and Tourism. Negotiating Place, Home and Identity*, N McIntyre, D Williams, K McHugh eds. CABI: Wallingford: 313–322.
- Quinn B. 2004. Dwelling through multiple places: a case study of second home ownership in Ireland. In *Tourism, Mobility and Second Homes*, C Hall, D Müller eds. Channel View Publications: Clevedon: 113–129.
- Sheller, M., and Urry, J. 2006. The new mobilities paradigm. *Environment and planning A* 38(2): 207–226
- Urry, J. 2007. *Mobilities*. Cambridge: Polity. アーリ, J. 著, 吉原直樹・伊藤嘉高訳 2015. 『モビリティーズ——移動の社会学』 作品社.
- Zelinsky, W., and Lee, B. A. 1998. Heterolocalism: an alternative model of the sociospatial behaviour of immigrant ethnic communities. *International Journal of Population Geography* 4(4): 281–298.